

トビウオ通信 (R5 第9号)

(本誌はホームページでもご覧いただけます。ホームページにはバックナンバーもあります。)

<https://www.pref.shimane.lg.jp/suigi/> (TEL 0855-22-1720)

《令和5年夏の漁況を振り返って》

島根県の夏の漁業として代表される、ばいかご漁業、しいら漬け漁業、とびうお漁について、令和5年夏の漁況を振り返ります。

※文中の「平年」は過去5年平均値（平成30年～令和4年）となっています。

ばいかご漁業 1隻当たり漁獲量 平年を上回る

石見地域のばいかご漁業は小型底びき網漁業の休漁期（6月～8月）に、日御碕沖から浜田沖の水深200m前後の海域で操業されています。

今期のばいかご漁業における総漁獲量は94.3トンで平年（77.3トン）の1.2倍、1隻当たり漁獲量は31.4トンで平年（25.8トン）の1.2倍でした。漁獲の主体は、エッチュウバイ（地方名：白バイ）が86.9トンで92.2%を占めていました。

平成10年～平成20年にかけては、エッチュウバイの漁獲量は60トン～120トンの間で大きく変動していましたが、平成21年以降は一部を除いて50トン～70トンの間で概ね横ばいとなっています。その一方で、1隻当たり漁獲量は増加傾向にあり（図1）、現在のエッチュウバイ資源の状況は良好であると推定されます。

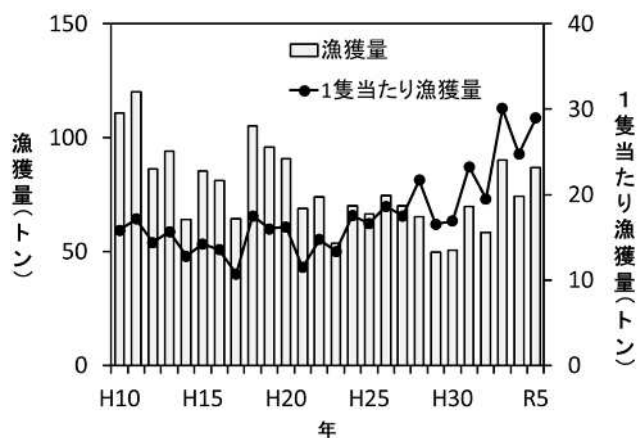


図1 石見地域のばいかご漁業におけるエッチュウバイの漁獲量および1隻当たり漁獲量の推移

しいら漬け漁業 1隻当たり漁獲量 平年を下回る

シイラ等の回遊魚は物陰に寄り添ったり、集まったりする習性があります。この習性を利用した漁法がしいら漬け漁業で、漬木（つけぎ）と呼ぶ竹の筏を海面に浮かべ、筏の影に集まった魚を網で漁獲するまき網の一種で

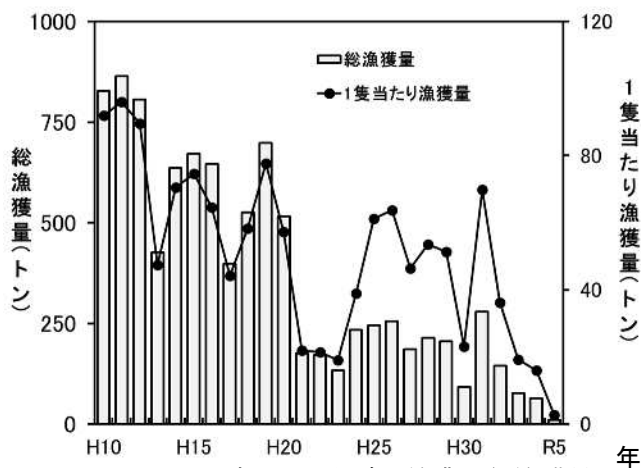


図2 石見地域のしいら漬け漁業の総漁獲量および1隻当たり漁獲量の推移

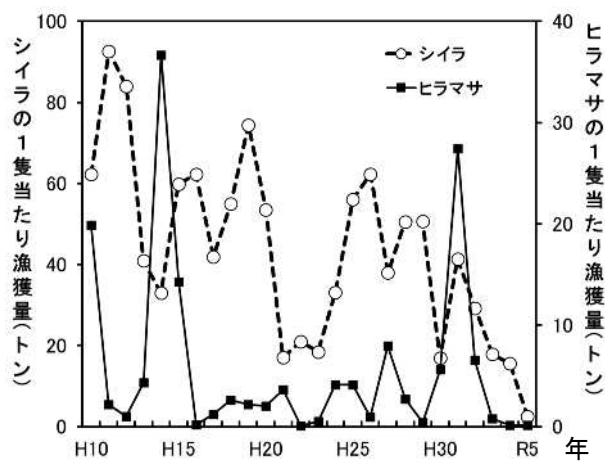


図3 石見地域のしいら漬け漁業のシイラとヒラマサの1隻当たり漁獲量の推移

す。本県では、主に小型底びき網漁業の休漁期に石見地域で行われます。

今期（6月～9月）の石見地域における水揚げ状況は、総漁獲量が10.6トンで平年（131トン）の1割、1隻当たり漁獲量は2.7トンで平年（32.9トン）の1割未満となりました（図2）。

魚種ごとの漁獲動向をみるとシイラの1隻当たり漁獲量は変動を繰り返しながら減少傾向にあり、多い年では60トンを超えていましたが、今期は記録の残る平成10年以降では過去最低となる2.5トンでした。また、ヒラマサの1隻当たり漁獲量は平成14年に36.7トンの漁獲があった以降、令和元年を除いて低調に推移しています。今期の1隻当たり漁獲量は164kgで平年（8.1トン）の1割未満となり、不漁だった昨年（159kg）並みとなりました（図3）。

とびうお漁 漁獲量 平年を下回る

トビウオ類は、初夏になると産卵のため山陰沿岸に回遊してきますが、県下全域で刺網、定置網、船びき網、まき網などの様々な漁法により漁獲されます。本県で漁獲されるトビウオ類は、主にツクシトビウオ（地方名：角アゴ、角トビ、大目）とホソトビウオ（地方名：丸アゴ、丸トビ、小目）の2種類です。

今期（5月～8月）におけるトビウオ類の総漁獲量は314トンで、平年（448トン）を下回りました（図4）。また地区別では、出雲地域が193トン、石見地域が68.3トンでそれぞれ平年（出雲地域：298トン、石見地域：99.9トン）の7割、隠岐地域が52.3トンで平年（49.2トン）並みの水揚げでした。

主な漁業種類別の漁獲量は、定置網が254トン、まき網が34.2トン、刺網が11.4トン、船びき網が10.7トンでした。

また、魚種別の漁獲量は、ホソトビウオが209トン、ツクシトビウオが104トンで、ホソトビウオが多く漁獲されました。

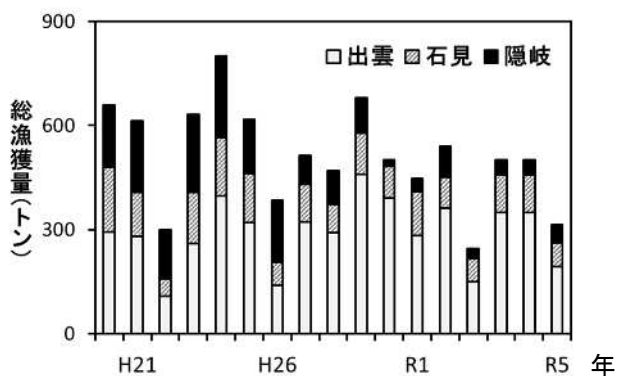


図4 トビウオ類の地区別漁獲量の推移（5～8月集計）

その他のトピック

今年の6月、8月における島根県海域の水温は、海面から水深100mまで、全体的に高めに推移しました。（図5）

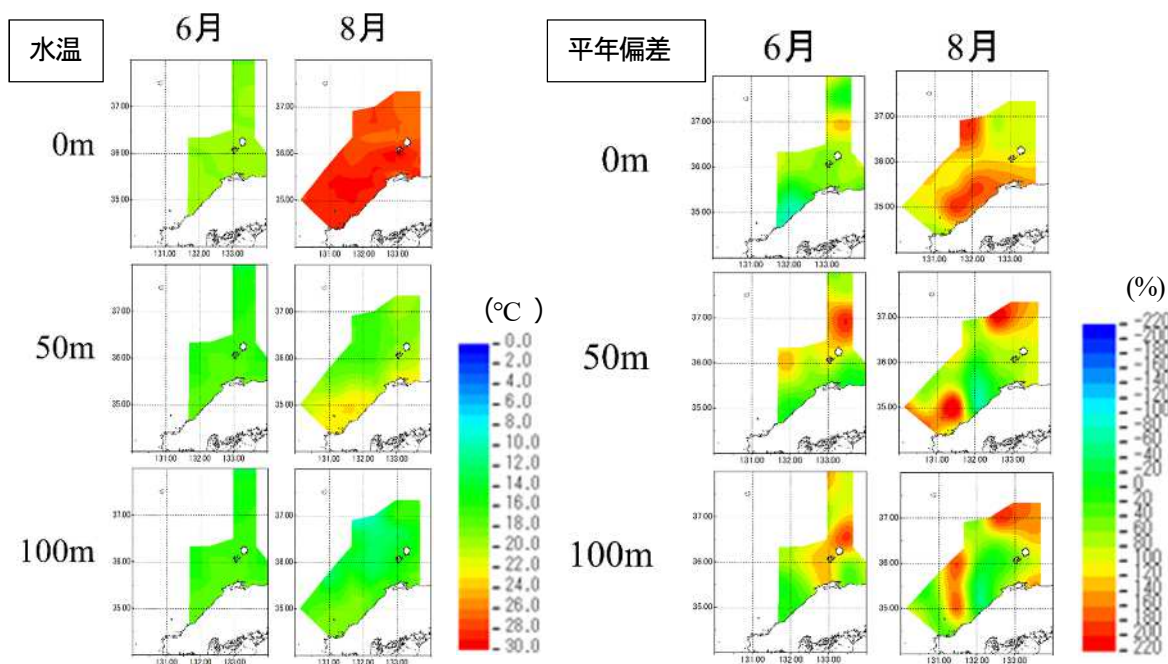


図5 島根県沖合における水温の推移（6～8月）

※平年偏差とは過去25年の水温の平均と比較して高いか低いかを示したもの